

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル: UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia and Africa (アジア・アフリカの文化と社会に関する東京外国語大学—マレーシア・サバ大学の交換講演会)

日時: 2015年3月23日(月) 14:30~17:30

場所: Meeting Room, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu

使用言語: 英語

要旨:

AA研の海外拠点であるコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)とマレーシア・サバ大学(UMS)人文学部との共催により2015年3月23日(月)14:30~17:30までアジア・アフリカの文化と社会に関する講演会を実施した。当日はUMSの学生や教官を中心に計77名が参加し、UMSの人文学部長 Dato' Mohd Hamdan Haji Adnan 教授ならびに KKLO 拠点長の床呂郁哉准教授(AA研所員)の両名による挨拶に引き続いて、日本側から3名、UMS側から1名(Dr. Paul Prodong : Senior Lecturer, Sociology & Social Anthropology Program, UMS)による講演と質疑応答を実施した。このうち日本側の講演者による各講演の概要は下記の通りであった。

講演1

“Human and Non-human Agents in the Creation of Topeng Dance Drama in Bali (バリ島舞踊劇トペンにおける人間・非人間のエージェント)”

吉田ゆか子(国立民族学博物館)

本研究はバリ島の仮面舞踊劇トペンを題材に、非人間中心的な分析を試みる。仮面、そして仮面と人々の関わりに焦点化し、新たなトペン像を描き、芸能研究に新しい視点を提示したい。本発表の目的は、トペンの表現や伝承における仮面の働きを明らかにし、仮面がトペンにおける重要なエージェントであることを示すと共に、トペンを人間と非人間のエージェントによる相互的な働きかけ合いの場として描くことである。なお今回は特に、上演中よりも、舞台裏で起こる人々と仮面の間やりとりを重点をおいて分析した。

トペンはバリの様々な儀礼にて上演される。通常1-3人ほどの男性により上演されるこの演目は、神々への捧げ物であり、また神々、人間、そして地霊・悪霊を楽しませる余興でもある。台本や演出家は用いず、大まかなルールの範囲内で、演者が即興的に演技する。この即興において仮面は重要な役割を果たす。なぜなら仮面が登場人物の性格を設定する

からである。

上演中の演者は、仮面を操りながら仮面に操られるという二重の意識を獲得するという (Coldiron 2004)。この背景には、バリのタクスー (taksu) という独特な力／概念の存在がある。タクスーとは、人を魅了する超自然的な力のことであるが、トペンにおけるタクスーとは第一に仮面が命を持つことだといわれる。そのため、演者たちは仮面と「一つに」なり、仮面に命を与えようとする。木材から切り出した命無きはずの仮面が、演者と一体化し、生き生きとするとき、人々はそこに超自然的な存在の働きを感じる。このような状態を彼らはタクスーの現れと捉えるのである。

演者はタクスーを得るために技術的な努力と儀礼の両方を行う。まず彼は仮面に相応しい、声、語り、踊りを選ぶ。また、上演前には仮面やその場に集まる神格へ供物を捧げ助力を乞う。

舞台上の演者は以上のように、仮面の性格や霊的な力に自らを捧げながら演技を行うのであるが、このような仮面の性格や力は、舞台裏で長い時間をかけて育まれる。まず、仮面職人は、仮面の性格を作り上げる上での重要なエージェントである。作成過程では、演者と仮面職人が相談しながら、また過去に作られた仮面をサンプルに用いつつデザインを決定する。演者（作成依頼者）、仮面職人、そしてサンプルを過去に作った職人、それぞれのアイデアや意図が交渉され、それが仮面という形に具体化される。そしてその仮面が未来の上演を支えるのである。

この仮面の霊的な力を高め、また演者との絆を強めるために、各種の儀礼が施される。これらの儀礼に用いられる供物は、演者の妻や母親によって準備される。彼女たちも仮面の魅力を支えるトペンの重要な参加者である。

また仮面は決して静的な存在ではなく、可変的な存在でもある。仮面は使い込むことでよりタクスーを得るとされる。演者は次第に仮面とより親しみ、より仮面に相応しい演技ができるようになる。また仮面は繰り返す上演により、何度も供物や聖水を捧げられ、演者の汗を吸収することで霊的な力を増すとされる。上演は一度一度きりのものであるが、仮面の中には経験が蓄積され、それが次回の上演を支えるのである。また、仮面は経年劣化や破損により表情を変えるが、それが演者に新しい表現を動機付けることがある。

仮面の表情が可変的であるように、仮面と演者の組み合わせも一定ではない。発表の後半では、贈り物や遺産となり人の手から手へと渡る仮面の働きを論じた。魅力的な仮面は受け手に、「この仮面を使いたい」と、上演を動機付けることがある。そのことを見越して仮面を贈る者さえいる。その上、演者が仮面の表情に応じて演技を構成するため、仮面を贈るという行為は演技内容の提案という側面ももつ。贈り手の意図やアイデアは、仮面を通して演者の演技に影響を及ぼすのである。

仮面は演者の引退後、息子や甥へと受け継がれる。これらの仮面が次世代をトペンの演技へと駆り立てる。一人の演者が仮面を付け替えながら上演する姿を見ると、仮面は演者にとって「仮の面」のようだ。しかし、一つの仮面が数世代にわたり使用されている姿

を見ると、人間の方が仮面にとっての「仮の胴」のようでもある。仮面は各時代の人々を魅了し、演者を獲得するのである。

以上のように、仮面は単なる役柄を表す演劇上の道具でも、超自然的な力の乗り物でもない。仮面の働きの重要な一つは媒介である。仮面の性格や超自然的な力やタクシーは演者の家族、仮面職人、僧侶、そして過去や現在の所有者（演者）によって培われる。これらの人々の努力やアイデアが仮面によって媒介され、観客を魅了する。パフォーマンスとは、過去と現在、そして舞台上と舞台裏で働く人々の意図や行為が反響しあうようなフィールドなのである。

講演 2

“Who is the owner of this land?: Possession and affect observed in the agrarian system in Songhay society (Western Niger)”

Yutaka SAKUMA (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

The title of this lecture is the question which I kept asking in Songhay language during my fieldwork. This lecture sheds light on the characteristics of the land tenure system of the Songhay society by examining the people's responses to this question.

Firstly, I pointed out that it is difficult to prove the structure of land ownership as found in previous studies, namely, that of landowners being those arriving earlier, such as chiefly families, while slaves and those arriving later had only usufructuary rights. Furthermore, since the increase in millet farming in the late 1960s, island dwellers began to cultivate this crop on the west banks of the Niger River. As a result, the situation had changed to the point where the chiefly families became non-owners of land, while the traditional non-owners, such as those arriving later and slaves, became landowners.

Secondly, I presented a theoretical consideration of the system of land ownership in Songhay society. The Songhay word “*no* (giving)”, used for the giving land, is used not only for the conferral or donation of land, but also in the sense of lending land. The distinction between donating and lending is intentionally vague; by contrast, it is acceptable for the lender to require the compulsory return “*ta-yon* (receiving)” of the land. This claim can still be valid after several generations have passed. The distinguishing characteristic of the land ownership system shown here is that the cultivator of the land can become the owner of the land despite only being a usufructuary for the time being; however, to become the owner, he must build a close relationship with the one who “gave” the land and avoid the land being “received” back

again. This is a subservient relationship which is also considered as a “relative” relationship. The typical people in this subservient position are those arriving later and slaves.

To sum it up, in the land tenure system of the Songhay society in Western Niger, there has been an underlying conflict between those who “give” land and those who are “given” land, in other words, those who “receive” land and those whose land is “received”. This conflict has existed over generations, and it's this very conflict that supports the foundation of their agriculture. The typical land “givers” were, at one point, chief's family and freemen, and those who are “given” land were slaves and members of other ethnic groups. But remember that the chief's family have shifted from the land “giver” on the island to its lender on the West side of the bank. This fact demonstrates that the “giving/given” relationship is rather fluid and it cannot be simply explained by fixed caste or class distinctions. Someone's caste and class show rather a mere snapshot of a long-lasting conflict.

講演 3

“Changing Landscape and Local Community in Kinabatangan, Sabah”

内藤 大輔 (Center for International Forest Research)

これまで東南アジア地域では熱帯林での過剰な商業伐採に際し、国や伐採企業と地域住民との間で、土地や森林資源を巡る数多くの対立が生じてきた。近年では、商業伐採に加えて、アカシアやアブラヤシのプランテーションの拡大などで急速に森林資源の減少が進むなか、森林保護区の拡大、森林認証制度やREDD+など市場誘導型の森林管理制度などの導入が、森林に依存して暮らす人びとに様々な影響をあたえている。

マレーシア・サバ州は、東南アジアにおける熱帯材輸出の中心的な地域であり、サバ州林業局は、1990年代から森林認証制度など持続的な森林管理を実施するための様々な政策を導入している。本発表では、東南アジアでも比較的早く大規模な商業伐採が始まったマレーシア・サバ州において、森林地域に暮らす人びとが、森林をとりまく環境の変化に対し、地域住民がどのように対応してきたのかについて、彼らの生業変容について、サバ州の代表的な熱帯材輸出地域であるキナバタンガン川流域に位置するD保存林と隣接するW村の事例を紹介した。

この地域では1950年代から、調査村の近くでの大規模商業伐採の開始にともない、村人の生業は森林産物採集から伐採労働へと大きく転換した。その後商業伐採の収束によって、伐採労働も減少していった。一方、サバ林業局は森林資源の減少に際し、森林資源の管理を強化した。とくに1997年にサバ林業局がマレーシアで初めて、国際的な森林認証制度の

一つである森林管理協議会（Forest Stewardship Council: FSC）による森林管理認証を取得している。森林認証取得後は、境界管理を強化するなど森林の厳格な管理を行ったため、焼畑耕作、森林資源の利用や狩猟採集など村人の生業は制限されることとなった。サバ州における森林認証制度の導入は、サバ州林業局が商業伐採によって稀少化してきた森林資源の厳格な管理を強化するツールの一つとしても機能していたといえる。

W村に暮らす人びとは、伐採労働に代わる現金収入を求め、出稼ぎまたは移転など村外で働く村人が増えつつあった。食費、子供の授業料、医療費などの費用は必要であり、仕事の機会獲得を模索する日々が続いている。アブラヤシの植栽も始まっていたが、十分な収入源とはなっていなかった。

熱帯アジアにおいて、W村のように森林に隣接して暮らし伐採関連労働からの収入が生活の糧となっていることが多い地域では、伐採労働に代わる生業がない場合、森林資源の稀少化は新たな対立を引き起こす可能性が高い。住民の森林資源へのアクセスを確保することは、村での生活を維持していくためにも、重要である。

以上